

より、巻四から男色は描かれており、また、「五人女」という物語を連句の一卷に見立て、揚句をめでたく詠む形式を踏襲し、巻五の結末もめでたいものとしたという説明がなされており、巻五の特異性を明確にするものではない。そこで、「五人女」に見られる女性の共同体意識、巻五のみに見られる怪異性の二方面から、「五人女」巻五の特異性について考察していきたい。

種田山頭火の「銃後」二五句について

博士前期課程 二年 及 川 和 憲

種田山頭火には、経本仕立ての小句集が七冊とこれらを一本化した若干の手を加えて昭和一五年四月に刊行された句集『草木塔』がある。『草木塔』は山頭火自身の意志によって残された集大成的な句集（一代句集）であり、山頭火俳句を研究する上で、非常に重要な句集といえる。

句集『草木塔』七〇一句は、一一の見出しが付された句群からなり、それらの中で「銃後」という見出しの付されている二五句は、句数的には最小の句群である。しかし、その内容は戦争とも関わり、句集中でも多くの問題を含んでいるといえる。

本発表は、同時代の俳壇において戦争を詠んだ句（「戦火想望俳句」などと呼ばれている句）との比較などを行うことにより、「銃後」二五句の特質についての考察を試みようとするものである。

橘逸勢の書風

羽田高校講師 中 川 聡

三筆の一人で知られる橘逸勢には、確実な真跡が残っていない。そこで、その書風について資料が注目される。

『江談抄』には、逸勢の書いた安衛門の額が「安嘉門の額は髪逆さまに生へたる童の靴沓を着たる体」で、往来の人々をたびたび蹴るといういたずらをしたが、額の中央を消すことによってそれがおさまった、という説話を載せている。

ここで、注目されるのが、「髪逆さまに生へたる童の靴沓を着たる体」とは何を意味するかである。春名好重氏は、これを逸勢の書風を表すものとみて、「逸勢の書は筆力が強くて筆勢が鋭かったことと考えられる」という。

しかし、現代人の書への見方と、平安時代の人々の見方では、観点が違うことは想像に難くない。「髪逆さまに生へたる童の靴沓を着たる体なり」という、妙に具体的な記述的な記述は、果たして逸勢の書風を表現しているものなのか、また、なぜ扁額の文字の中央を消したら童子がいたずらしなくなったかなど、書風と解したのでは理解できない疑問が残る。

そこで、まず『江談抄』の記述から、逸勢の書風を見ることは可能か、ということについて論じ、扁額の書が、どのような意味を持っていたかということについて論じてみる。